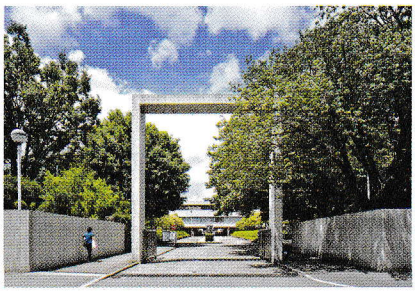
2018.10 no.81

aaca

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

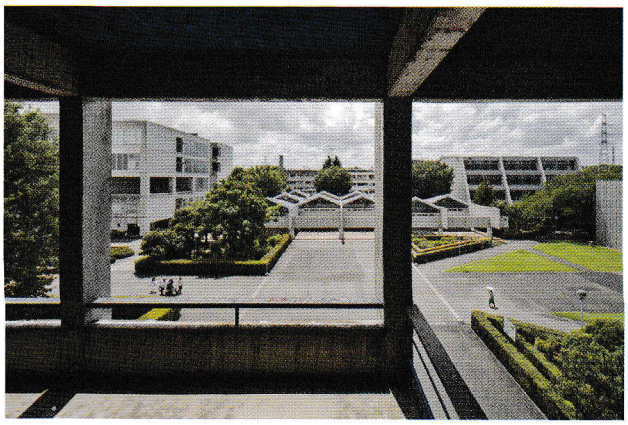
設立30周年

武蔵野美術大学キャンパス（設計：芦w原義信　撮影：武蔵野美術大学　2011 年）



正門（1968 年）

表紙解説



デザイン棟２階よりアトリエ棟を見る

本館（1 号館）（1968 年）：1 階の内部的外部空間

美術資料図書館（1967 年）

デザイン棟（8 号館）（1967 年）

武蔵野美術大学キャンパス計画
（設計：芦原義信、1964 ～ 1991）

武蔵野美術大学キャンパス計画は、芦原義信が 1964 年から 17 年もの長き期間にわたり携わった建築である。RC 造の正門をくぐると、なだらかに延びるアプローチが訪れる人を迎える。正面に見える本館（1 号館）に吸い込まれるように入ると、そこはメインの動線が交錯する”内部空間に浸透したような外部空間”、芦原流にいうならば「内部的外部空間」である。そして中央広場に出ると、正面に図書館棟が見える。当広場に面するのはもう一つの軸を構成する「デザイン棟」と「アトリエ棟」。なかでも「アトリエ棟」は武蔵美術大学鷹の台キャンパス計画の起点となった 1964 年竣工の建物である。全体が 9600mm 角のグリット状の壁で構成されたモダンな建築フォルムは耐震改修工事を経て今でも健在で、静かな佇いにこれまで多くの学生に愛されてきた歴史が感じ取れる。

キャンパスという多様な複合性を統一するために至る所に点在する”余白”。それらが醸し出す空間の心地良さ。まさに見事な空間のシークエンスである。これら「図」と「地」が反転する時、当初のマスタープランが長いレンジを越え、時空を超えて続いていく。

（文：三上紀子）
（撮影：吉田誠）

体育館（1967 年）

アトリエ棟（1964 年）：1 階ピロティ

鷹の台ホール（1966 年）

○芦原義信　（1918-2003）建築家、工学博士、東京大学名誉教授、日本芸術院会員、aaca 設立者

東京大学工学部建築学科卒業後、ハーバード大学大学院で修士号（M.Arch.）取得。昭和 31 年、芦原義信建築設計研究所（後に芦原建築設計研究所と改称）を設立。建築設計の傍ら、法政大学教授、武蔵野美術大学教授、東京大学教授を歴任。日本建築家協会会長、日本建築学会会長を務める。建築作品は、東京オリンピック駒沢公園体育館・管制塔（1964）、銀座ソニービル（1966）、モントリオール万国博覧会日本館（1967）、国立歴史民俗博物館（1972）、東京芸術劇場（1990）など多数。著書に『街並みの美学』（毎日出版文化賞）、『隠れた秩序ー二十一世紀の都市に向ってー』等。勲二等瑞宝章受章、文化勲章受章など数々の賞を受ける。

CONTENTS

■芦原義信生誕 100 年を迎えて
正統なモダニズムの継承者　芦原義信（2）　飯田郷介　4

■時代の華一輪
「時代の華一輪」　懐古そして未来　広報委員会　6
松本哲夫会員におききする
「aaca とのお付き合いも、いつの間にか 50 年」
広報委員会　8

■会員活動レポート
智を以て策を練り　美を以て術を成す　髙木久美　12
現代アートとしてのガラスの可能性　中嶋クミ　13
空間におけるテキスタイル作品の制作について　雨山智子　14
香港「志蓮淨苑」の思い出　黒谷宗弘　15

■法人会員の企業活動を訪ねる
コクヨ株式会社を訪ねて　広報委員会　16

■第 2 回 BOX 展　30cmx30cmx30cm の空間を遊ぶ
開催報告　山﨑和子
審査講評　中村茂幸　18
BOX 展に参加して　鈴鹿しげみ　19
河端梨太
受賞作品　20
出品作品　21

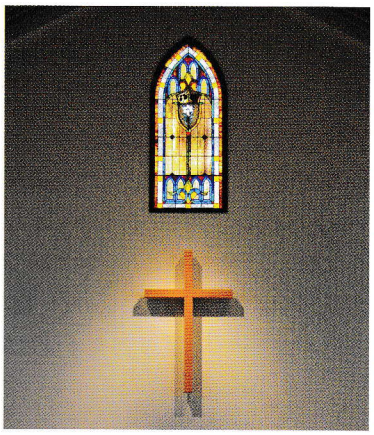
■委員会活動報告
「第 193 回 aaca フォーラム」開催報告　須藤玲子　24
「aaca30 周年記念講演会」開催報告　調査研究委員会　25
講演会「日本福音ルーテル日吉教会ステンドグラスの修復」に参加して
広報委員会　26
設立 30 周年記念事業
設立 30 周年記念事業実行委員会　27

■事務局だより　28

▶▶ 8

▶▶ 18

▶▶ 25


▶▶ 26

芦原義信生誕100年を迎えて

正統なモダニズムの継承者　芦原義信（2）

広報委員会委員長　飯田郷介

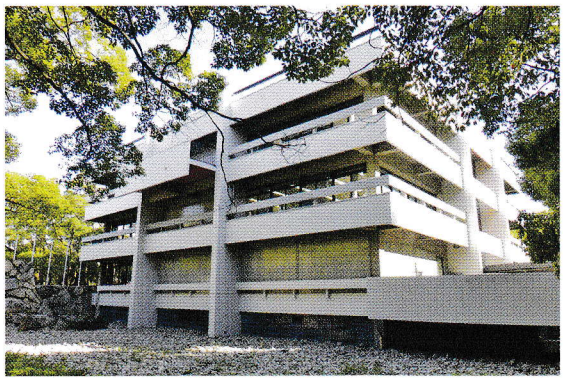
華麗なる一族（後編）

戦後間もなく、芦原義信は、「復員してきて、本当に食うものもなく、どうしようかなというふうなことを考えましたとき、たまたま東京都の復興のコンペがありまして、それを一生懸命、製図板がないので床にケント紙を張って書いたりしたのが、どうしたはずみか、びりっかすで入選いたしましたので、待てよ、設計をやってみようかなあという感じになりました」*1と建築家の第一歩を踏み出した。そしてこのコンペの後、後の新日本製鐵（現・新日本住金）の八幡のヘルスセンターの仕事が舞い込んだ。この八幡製鉄保健館（1949）は、小さな二階建ての戦後初めての鉄骨の建築であった。そして北代禮一郎の現代建築研究所へ入所したがどうしてもアメリカに留学したいと思い、昭和25年（1950）フルブライトの留学生試験を受験するがみごとに失敗する。しかし「捲土重来を期して、今度は少し勉強して」翌年合格し、「『お前、どこへ行きたいか』と聞かれたので、たしかハーバードというのは有名な大学だと思ったんで、ハーバードへ行きたいといったら、そうかっていうのでやってくれました」*1とハーバードの大学院へ入学した。戦後日本からハーバード大学の建築学部へ入ったのは芦原義信が初めてである。そして昭和27年（1952）羽田から飛び立ったが、妻と二人の子供を置いての単身留学であった。留学早々、教授にヨーロッパの建築スタイルを真似たスケッチを見せたところ「『君は東洋の国からきた青年であり、ヨーロッパからの留学生ではない』独自で創造的であれと。模倣によって価値は喪失するというわけです。日本の大学教育の場ではこうした言葉は聞いたことがなかったので、これは強烈でした」*2と建築家は自分の力で自分の発想で建築を構成してゆかなければならないということを繰り返し教えられた。この留学中の苦労があまり語られていないが、建築史家村松貞次郎は、「ハーバード大学デザイン学部大学院に学んだ彼の悲壮感と苦労は並大抵のものではなかった、と思われるが、それをまったく表わしていないところも、陽性・積極的な彼の人柄とやはりその血によるものであると思われる」*3と芦原義信の人柄を語っている。

昭和28年（1953）ハーバード大学大学院を終了すると、マスター取得者は一年間アメリカで働くことができたので、かねてからマルセル・ブロイヤーの空間構成に非常に興味を持っていた芦原は、ブロイヤーに手紙を出し、建築事務所へ入所した。一年たらずのブロイヤーの事務所勤務であった。そしてどうしてもヨーロッパに行って建築を見たくなり、ロックフェラー財団の奨学金に申請した。その面接で「どうしてもヨーロッパへ行きたいんだ。建築というものは本で読んでもわからない。体で感じないとできないから、ぜひ行かせてくれ」という大胆な答えに「なかなかいいこというじゃないか、それじゃ行きなさい」とすんなり試験をパスして、フランスとイタリアに向った。パリでは叔父藤田嗣治のモンパルナスの家に二ヶ月ほど滞在し、「私は毎日この叔父の家を出て、十九世紀にオスマンによって整備されたこの美しい街、街路の両側には軒線から窓の形まで整然とそろった石造建築が立ち並び、街路の要所要所には歴史的な名建築が配されたパリ中を」*2隈なく歩き回った。

そんなある日、マルセル・ブロイヤー設計事務所時代の友人がコルビュジェのアトリエで働いていたので、その友人に頼んでコルビュジェのアトリエを案内してもらった。あいにくコルビュジェは、不在であったが、コルビュジェの仕事部屋を見せてもらい。テーブルの上にたくさん散らばっていたコルビュジェの描いた建築のスケッチなどを見ることができた。そしてコルビュジェが設計したマルセイユに建てられた集合住宅ユニテ・ダビタシオンを見に出かけ「この建築はまさにプロポーションのよい巨大な彫刻であって、内部の空間や機能は外部か

リッカー会館（現・Daiwa 銀座ビル　1963）



香川県立図書館（現・香川国際交流会館　1963）

岩波神保町ビル（1968）

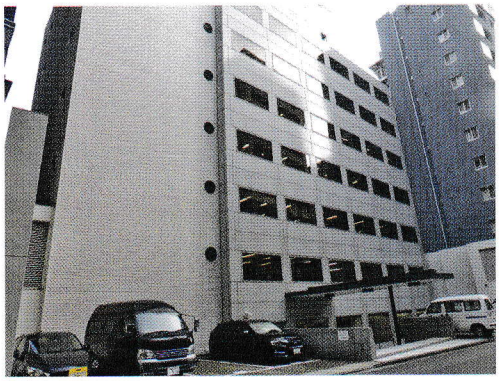
ら極度にしめつけられているのではないだろうか」*1と、この建築を人が住む住宅というよりも彫刻的であり記念碑であると評している。

またイタリアでは、トスカーナ地方の中世の城郭都市シエナを訪れてカンポ広場を見て、またサンジミニアーノのチステルナ、ドゥオモの両広場を見て「この広場は家の『そと』であるか『うち』の居間の延長であるか分からない、あたかも『一軒の大きな建築のような都市』あるいは『外的秩序のある街』といった表現がぴったり当てはまる都市の空間なのです。まさしく私の異文化接触ですが、ここに佇んでわたしは発散的な日本の木造建築の空間とまったく異なる空間にはじめて接し、なんともいえぬ不思議な心のときめきを感じました。イタリアは今でも私の最も好きな国のひとつですが、この時の経験は現在にいたるまでずっと建築家たる私の思想の根幹を担っているように思います」*2と語っているが、この旅行は後の学位論文『外部空間の構成』に向う最初の出会いであり、さらに『街並みの美学』へ繋がる極めて重要な旅となった。こうして最後にマルセイユから、日本郵船の貨物船に乗って40日かかって帰国したが、すぐにお金がなくなり、パーサーからお金を借り、神戸に着くとすぐ奥さんにお金持ってきてくれと電報を打ち、やっと下船できたそうである。なんとも大らかな時代であった。

昭和29年（1954）秋、「帰ってきて、さァ、どうしようかな、これから何をしようかなと思って、丸ビルを歩いているとき、中央公論の栗本和夫さんという専務にばったり会ったんです」*4そして「おまえ、何してるんだ」と聞かれ「実はアメリカで勉強してきたんだけれども、どうしようかと考えているところなんです」と答えると栗本和夫は、「実は中央公論がいま70周年の記念にビルを建てることになっていて、清水建設に頼んじゃったけれども、それなら、おまえ、案を持ってきなさい」と提案され、芦原は徹夜徹夜で設計案をつくって持って行ったところ「お、これはいいじゃないの」と中央公論本社ビル設計の仕事が舞い込んだ。中央公論社との縁は、兄の英了が終戦直後の昭和21年（1946）4月中央公論社に入社し、翌年から「婦人公論」の編集長となり、昭和28年（1953）12月まで勤めたことがあったが、不思議な縁である。そして中央公論本社ビルが昭和31年（1956）10月1日に竣工すると、完成したばかりの中央公論本社ビルの7階の部屋を借りて芦原義信建築設計研究所を創立した。たった6人でのスタートであった。

設計事務所を開設したが、「その次にやることがなくなって困ったなあっていうときに、われわれの先輩で内藤亮一さんという方が横浜市におられました。その方が当時建築局長をしておられまして、実はやることがなくて困っているんだといって遊びに行った。『君、病院やったことあるか。』っていうから、『いや、そんなものやったことはない。』と。『なかなかいいことを言う、面白いね、君は。じゃひとつ病院やってみたらどうだ。普通、なにかやったような歯ぎれの悪い話をするけど、全くやったことないなんて言うのは面白いね。』」*1と実直な芦原義信は幸運に恵まれ、横浜市の横浜市立市民病院の設計を依頼された。ちょうど村野藤吾設計の横浜市庁舎の工事が進んでいた頃である。横浜市立市民病院も無事竣工してその出来栄えに喜んだ内藤亮一から、更に山形県立中央病院の仕事を紹介され、事務所の仕事が段々と増えていった。更に中央公論社が岩波書店を紹介してくれて、以後、岩波書店のビルは独身寮から営業部、本社屋、神保町ビル、アネックス、新館まで仕事が続いた。

出典
＊1『建築空間の魅力　私の体験』芦原義信著　彰国社
＊2『建築家の履歴書』芦原義信著　岩波書店
＊3「正統なモダニズムの継承者」村松貞次郎『日本現代建築家シリーズ⑥』新建築社
＊4『日本現代建築家シリーズ⑥　芦原義信』新建築社


岩波書店本社ビル（1970）

岩波書店一ツ橋別館（1986）

写研本社ビル（1972）

時代の華一輪

「時代の華一輪」　懐古そして未来

広報委員会

1990年10月発行の当協会会報4号からスタートした「時代の華一輪」。

その発案者は建築家：柳澤孝彦氏（当時協会理事・広報委員長）です。

氏は会報4号の【「時代の華一輪」のスタートに際して】に以下のような想いを寄せられています。

「時代とともに人々の心が千差万別のカタをつくり建築や美術や工芸の分野が相互に有機的な関係を持ちながら、総合化された芸術の運動として時代の華を咲かせてきた。現代にもこのような時代の華を咲かせようと、会員諸氏がデザインや都市の華を語る場としていきたい。」

このコンセプトを継承し、そうそうたる当協会会員の方々の寄稿によって今もなお続く「時代の華一輪」は、当協会の独自性を象徴するシンボリックなタイトルといえます。

会報のバックナンバーを辿っていくとそれはもう実に様々な変化にとんだタイトルを目にすることができます。建築・都市・絵画・彫刻・旅行・風景・素材や技法・・・さすが建築、美術、工芸分野の方々が一堂に会する当協会ならではのコラムと改めて実感いたします。

これからも「時代の華一輪」の多種多様な伝統を継承し、更に魅力あるものとするために当協会会員の方々の積極的で自由なご寄稿に大いに期待したいと思います。

日本建築美術工芸協会創立30周年の今年、会報も前号で80号となりました。

会報80号の節目を迎え、長きに渡って自由多彩な想いを語り続けてきた「時代の華一輪」の原点を再認識する機会と捉え、同時にこれからの「時代の華一輪」のますますの躍動への再スタートの機会にもしたいと思います。

そこで以下に2011年以降に掲載された「時代の華一輪」のタイトル・寄稿者名と、原点となる柳澤孝彦氏の「時代の華一輪」全文を掲載いたします。

（構成：田島一宏）

[60号] 2011年9月
永遠のミケランジェロ　神谷ふじ子

[62号] 2012年8月
感じること、学ぶこと　山本　誠

[63号] 2012年11月
壁画のいのち　杉本　充
仕事への思い　島田　恭子
織物とコンピューター　中野恵美子
グラッフィード技法を使った壁面　谷口千恵子

[64号] 2013年3月
ボタニカル・アート考　石塚　一男
作品を生む環境、素材・技法、ファンタジー　信ヶ原良知
素材と技法への挑戦　鈴木　法明

[65号] 2013年7月
陶芸家として　伊藤　五恵
横浜のステンドグラス修復　平山　健雄
MITSUO FUKADA　深田　勝江
STEIN WASSER UND ERDE2013

[67号] 2014年3月
制作と出会い　井上　勝江
素材・現代の様相 - 次への制作 -　大島由美子

[68号] 2014年7月
Power of Art　小野寺優元

[69号] 2014年11月
彫刻と空間　馬屋　正
空間に絵を描くように　高柳　登美

[70号] 2015年3月
白の色彩からMAZIORAへ　甲谷　武
軽やかな空間と素材力　大河内久子

[71号] 2015年7月
汚れないマンネリズム　河村純一郎
私の創作活動　櫻井　孝美
ニューヨーク展覧会について　高橋　幸子

[72号] 2015年11月
中野　献一
〈時空間〉をテーマに　山﨑　和子

[73号] 2016年3月
未来のファイバー・ワーク　小泉　伸子
アートは楽しい　川原　昭

[74号] 2016年7月
私の木版画展　香川　亮
美津島徳蔵―画廊ビルを舞台に　天方　光彦
アーティストと経営　古後　信二

[75号] 2016年11月
芸術的な焼物文化を歴史に刻む仕事　常松　欽治
「空間」としての彫刻　田中 ショウ

[76号] 2017年4月
何故こんなにも心惹かれるのか　置鮎早智枝
まだまだ・・・未々・・・そしてこれから　吉野ヨシ子
―土に魅せられて―　小野寺恵美

[77号] 2017年7月
岡本雪子作品展 ＋ 賢　岡本　賢
再会Ⅲ―久しぶりのクラス会展　中野恵美子

[78号] 2017年11月
「パリ・シナジー展」　平山　健雄
建築家たちのスケッチ展　山本　俊介

「時代の華一輪」のスタートに際して

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずというごとく、四季を確実に繰返してきた自然の営みの姿は、有史前から変わってはいない。しかし人々の心は、その人々の心の数と、生きている刻々の刹那や月日の時間の積だけ無数に千差万別の貌をつくってきた。それらは時に、芸術として時代の貌をつくることもあった。その時芸術は、時代の華のごとく咲き乱れるものであった。ルネッサンスや、アールヌーボーやセセッションの時々に－。

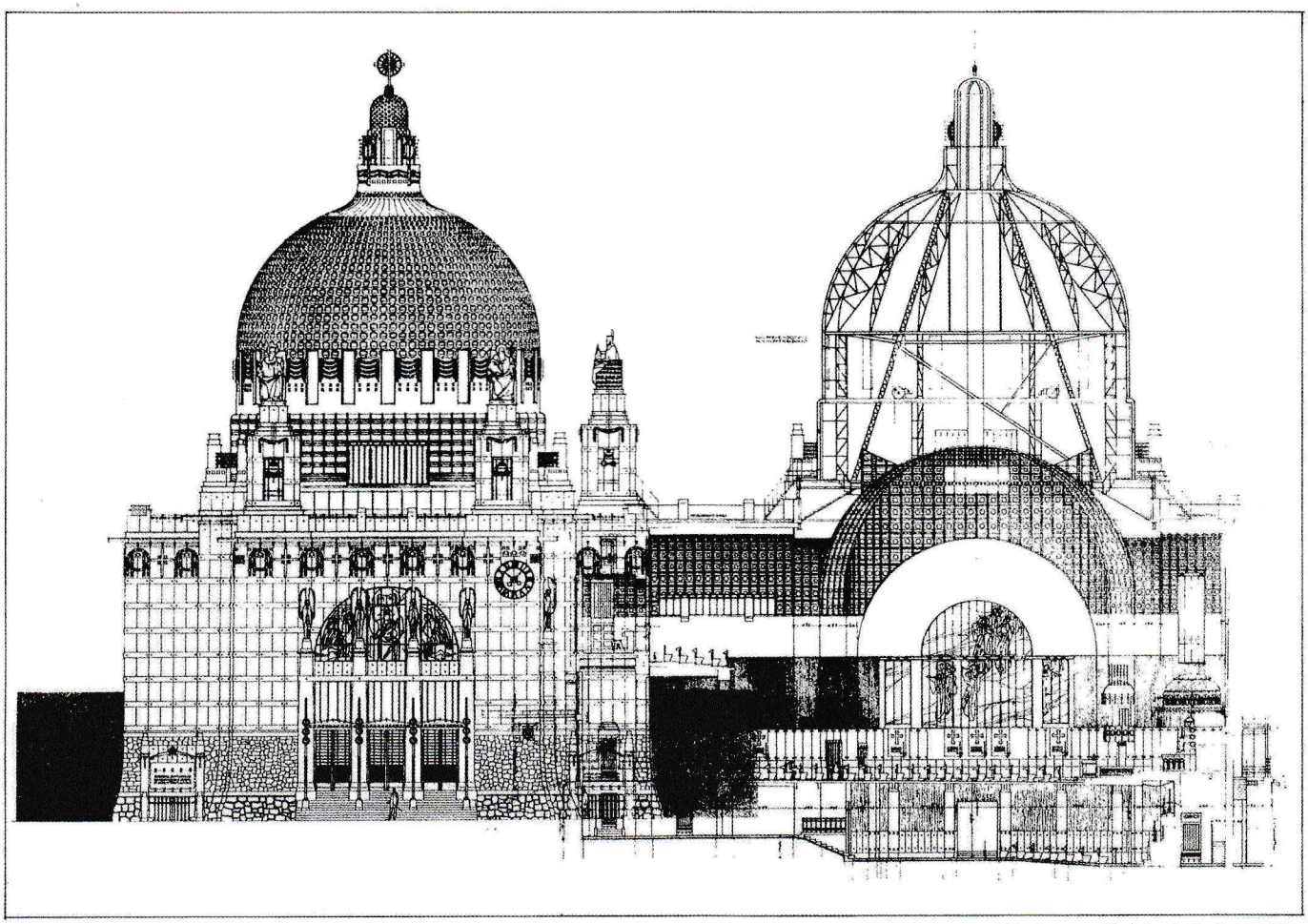
それらはいずれも、建築や美術やそして工芸の分野が相互に有機的な関係を持ちながら、総合化された芸術の運動として、めくるめく時代の華を咲かせてきた。

現代にもこのような時代の華を咲かせようと、建築美術工芸協会の活動がいよいよ活発化している昨今、本号はいわば現代の華一輪ずつを持ち寄った特集とでも言うべきものとして、会員諸氏の「私と自然」「私と絵画」・・・「印象に残る風景」「ある街角」「私と生活」・・・といった思い入れを「一枚の写真」に寄せて語って頂こうというものである。

そして本号の特集をかわきりに、次号からは「時代の華一輪」欄として次々に会員諸氏に登場していただき、デザインや都市の華を語る場としていきたい。

そこで特集の表紙として、ウィーンに咲いた時代の華を選ばせていただいた。オットー・ワグナー設計のアム・シュタインホフ教会を飾る、コロ・モーザの手によるステンドグラスである。コロ・モーザの確かな表現力は、新しい時代へのデザインの息吹きを鮮烈な光で放射している。光の背景には、あの心ときめくようなウィーン分離派の時代が漂っている。クリムトが、シーレが、あのアルマのいたマーラーが、ココシュらが咲かせた華々は、世紀末の落日のごとき一瞬の輝きのようでもあり、それはまた来るべき時代に射し込む光でもあったのだった。

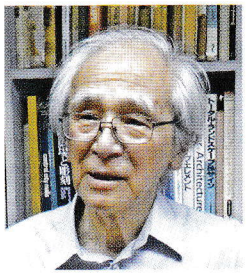
（柳澤孝彦）



Otto Wagner, Kirche am Steinhof, Projekt 1904
（会報４号から）

松本哲夫会員におききする「aacaとのお付き合いも、いつの間にか50年」

広報委員会インタビュー



松本　哲夫氏

<プロフィール>
1929年東京生まれ。1953年千葉大学工学部建築学科卒。同年通産省工業技術院工芸試験所技官。1957年（株）剣持勇デザイン研究所チーフデザイナー。1971年同代表取締役、1977年社名変更により（株）剣持デザイン研究所代表取締役、現在に至る。

広報委員会では、日本建築美術工芸協会の会員で株式会社剣持デザイン研究所の所長をされている松本哲夫氏からお話を伺いました。松本氏は日本建築美術工芸協会の前身である日本建築美術工業協会の時代から関わられてこられた、協会にとっては一番歴史ある会員のお一人です。松本氏からは、協会の歴史、剣持勇先生との出会い、芦原義信先生とのお仕事など多方面にわたって楽しいお話を伺うことができました。

—松本哲夫所長は、剣持デザイン研究所でホテル日航サイパン、京王プラザホテルなど数多くのインテリアデザインを手掛けられ、変わったところではJALジャンボジェットファーストクラスのラウンジやJR東日本・JR東海新幹線電車、特急電車のデザインなど幅広く活躍され、毎日デザイン賞や日本インテリアデザイナー協会賞など数多くの受賞をされています。まずは建築の道に進まれたあたりから、お話しを伺いました。

私の父親は伊勢の宇治山田出身で、母親は四谷見附にあった材木屋の長女で、私は、男3人、女3人の長男として東京の駒込で生まれ育った。東京都立第九中学校（現・都立北園高校）に入学した時は、学校は当時珍しい鉄筋コンクリート造りで、暖房はスチーム暖房、トイレは水洗でびっくり仰天した。

昭和4年生まれで、軍国主義教育を受け、純粋培養軍国主義者だった私は、戦争中は戦闘機の設計をやりたかった。しかし敗戦で、造船学科も航空学科もなくなり、目標がなくなって、東京の家は焼失して、どうやって生きようか、何をやろうか困っちゃった。日建設計の林昌二も私と全く同じで、当時一高にいた彼は、工学部へ行って軍艦や飛行機の設計を目指していたが目標を失った。そして周りのだれかが「設計だとこれからは建築かな」と言うものがあり、林昌二は、建築を目指した。

私は、一年先輩に建築の設計に関わっていたのがいたので、のぞいてみたら面白そうだなと思った。そこは大江宏建築設計事務所だったが、現れた大江宏は、かっこよかった。大学は、早稲田大学も受かっていたが入学金がめちゃくちゃ高くて払えないので、国立の千葉大学工学部建築学科に入った。

大学時代は、大江宏が設計した法政大学の工事現場には、よく見に通った。大学三年の夏休みには、（初代）銀座ヤマハビル（アントニン・レイモンド設計、1951年）の現場にアルバイトに行き、コンクリート打ちを体験した。一度やると全部覚えた。学校へ行くよりも工事現場のほうが勉強になった。4年の時には、新丸ビルの現場でアルバイトしたが、現場って面白い、いろんなことを覚えた。

—松本哲夫所長は、剣持勇先生から乞われて剣持勇デザイン研究所（当時）に入所されましたが、剣持先生との出会いなどについてお話を伺いました。

1953年（昭和28年）千葉大学を卒業したが、朝鮮戦争が終わりかかっていた時期で仕事がなくなり、建築設計事務所はどこもとってくれなかった。3月の初旬、大学へ行ったら、通産省の研究所は、本がいっぱいあるから給料をもらって本が読めるぞと紹介され、出向いていくと、ちょうど面接試験があり、ドイツ工作連盟について知っていることがあればしゃべってくれと言われ、勉強したことなので、知っていることをしゃべくりまくったら、もういい、おしまいと帰された。不合格と思ったら合格し、商工省工業技術院産業工芸試験場に入所した。

当時の部長が剣持勇だった。私が入所した時、剣持部長は、第3回アスペン世界デザイン会議に初の日本代表として海外出張中であった。アメリカ帰りの蝶ネクタイをした剣持に最初にあった印象は、きざな奴だなと思った。最初は嫌いだったけど、いつに間にか馬が合うようになった。

剣持部長の下で最初の仕事は、アメリカ・カナダ国際見本市に向けた日本商品見本市のためのノックダウン方式のショー・ルームを手掛けた。面白かった、そして頑張ったところ、以後展示の仕事をたくさんやらされた。その後、装備意匠係という部門で、家具のノックダウンの研究テーマを自分で決め、素人でも組み立てられるようなジョイントを考える4年間だった。

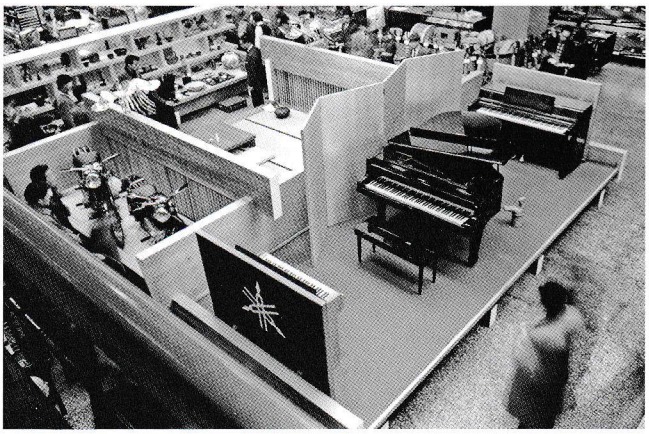
剣持部長が1955年（昭和30年）工芸試験所を突然辞職した。奥さんにも話さずやめたので奥さんも驚いていた。組織をやめる人は大抵仕事を持ってやめるが、剣持はそれをやらなかったからゼロからのスタートで人も雇えなかった。そのうち剣持から声がかかり、試験所の仕事を終えてから、青山の事務所で夜のチーフデザイナーとして働き、試験所勤務との二足の草鞋の生活が暫く続いた。そして給料も払えるようになったので、また建築を勉強した人間を手元に置いておきたかったようで、剣持から誘われて1957年、剣持勇デザイン研究所に入所した。私も役人になる気は、もうとうなかったので。

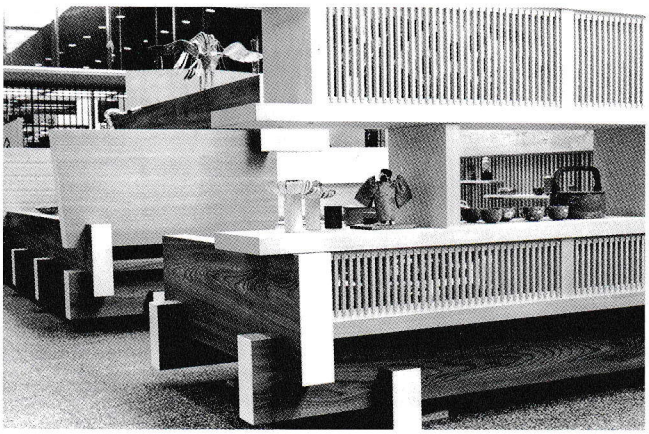
—剣持勇先生は、東京高等工芸学校（千葉大学工学部の前身）木材工芸科を卒業後、商工省工芸指導所（当時仙台）に入所、数多くの家具デザインを手掛けられました。ブルーノ・タウトが工芸指導所に在籍した折は、剣持先生は、直接指導を受け、後に『規格家具』（相模書房　1942年）を著した日本の家具デザイナーの草分け的存在です。その剣持先生のお人柄、エピソードなど伺いました。

剣持は、アメリカに2回も行き、チャールズ・イームズなどとも友達になりアメリカのデザイン業界を見て、日本もいずれそうなると考えて独立したと思う。だから、インテリアデザイナー協会や日本インダストリアルデザイナー協会（JIDA）などのインテリアデザイナーの団体を創った。

また剣持は、建築家との付き合いは非常に多かった。語学力が不十分なのに、ブルーノ・タウトをあちこちに案内したり、シャルロット・ペリアンとか、だれでも友達になっちゃう。

それから、真夏ランニング姿で仕事をしていた時、ボーナスをあげるというので剣持所長室へ行くと剣持は真夏だというのにスーツにネクタイといういで立ちで、「なんだその恰好は、ちゃんと上着を着てネクタイを締めて来い」と言われ、ネクタイを一人が持っていたので、順番にネクタイを締めて、順番にボーナスをもらったことがあるがアメリカナイズされた人だった。





日本楽器製造カリフォルニア国際見本市出品展示用ノックダウン方式のショールーム（松本哲夫デザイン）。旧・銀座ヤマハビル1階での内覧会

—AACAとの関りについて伺いました。

日本建築美術工芸協会の前身である任意団体日本建築美術工業協会が1968年に設立されたが、メーカーの方々が正会員で、建築家やデザイナーは協力会員だった。剣持も協力会員として参加していたので、剣持が会議に出席できなかった時は、私が出席したことがあったが、あまり記憶に残っていない。そして芦原義信先生が文化庁に強かったので、芦原義信先生を中心に1988年、文化庁所管の社団法人日本建美術工芸協会が設立された。当時の協力会員の方々がつくった団体で、協力会員と正会員との立場が逆転した。アーティストも建築家側だった。

設立の話があった時、立ち会ったが、芦原先生は会長としてピッタリだった。協会活動の中で、入っているだけで何もしていないが、もう50年の付き合いになる。

—芦原義信先生とご一緒されたお仕事について伺いました。

芦原先生とは、独立した当時からの付き合いで私は、「あしさん」と呼んでいた。霞が関ビル東京會舘（1968年）が芦原先生との最初の仕事で、東京會舘とご縁があった芦原さんが統括して、35階のレストランのインテリアを剣持事務所が担当し、大きな宴会場は芦原事務所がやることになっていた。

霞が関ビルができた当時は、日本で初めての超高層ビルなので、まだ内装の制限についてはっきりした法律はなかった。スプリンクラーはあるけれど燃えてはいけないという程度の判断だった。燃えてはいけないので、そこで考えて私はブロンズのエッチングをしたパネルをユニット化して壁面に使い、天井にはテクスチャーが欲しいのでブロンズパネル30センチメートル角を使用し、バーカウンターの腰もブロンズパネル、徹底的にブロンズを使った。当時ブロンズは安かった。しかし、ベトナム戦争が始まろうとしていたので、私はメーカーに掛け合い、材料の銅などを早めに抑え、値上がりする前に原材料を抑えることができた。今でも忘れられない出来事だった。やったことがないことばかりやった。

また、剣持が見てきた宮脇愛子の個展で、金属でつくったパイプがびっしりつまったようなマケットの作品がなかなか面白いということで、レストランのスクリーンとして制作した。水平なパイプを覗くと外の景色がパイプの内側に反転して写るので面白かった。最後は大宴会場も手掛けることになった。

霞が関ビル東京會舘レストラン

霞が関ビル東京會舘レストラン　ブロンズのエッチングパネル

—芦原義信生誕100年記念「美味しい美術館散歩」でご一緒していただいた国立歴史民俗博物館の展示計画をご担当された当時のお話を伺いました。

なかなか大変だった。一年間くらい歴史展示を行うために、歴史学者たちが集まってディスカションするわけです。それを聞いていろと言われて、その会話をもとにイメージスケッチを出してくれと言われた。

大正デモクラシーの時代に軍縮が始まるのです。そして関東大震災以後軍人がまた政治の中に出てくる状況になっていき、戦争への道が始まると私が発言すると、歴史学者の色川大吉（日本近代史）から「松本さんそれはダメだ。それは松本さんの歴史観であって、それは歴博にはだめです」と言われた。あくまでも客観的な事実を並べていって、それを見た人が自分の歴史観をつくっていく。だれかがつくった歴史観はだめと言われちゃってね。なるほどなと思った。館が一定の思想の下に展示してはだめだというのが井上光貞（歴史学者、初代館長）の方針だった。一年間、最先端の考古学者、歴史学者や民俗学者の議論は面白かった。色々と勉強になった。面白かったです。

色川大吉は、スキーの好きな先生だった。講演を頼まれると雪のある時期にしてくれと、一日スキーをしていた。デザインをやっている現場を見るのが好きな人だったから剣持事務所にもよく遊びに来た。

私が任された展示計画は、どこに何を持ってくるかが我々の仕事で、映画セットのような細かい展示計画は、展示業者のトータルメディアの仕事で、私は基本設計だと主張すると、一部からこれは展示デザインではないと言われたので、すべて引き上げると言ったら、井上光貞氏から「ちょっと待って、あずからせて欲しい」と言われ、ものの組み立てだけはOKをもらった。

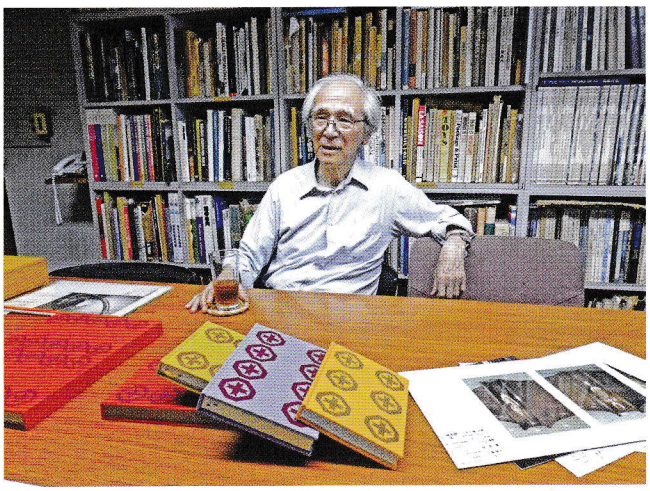
玄関のアプローチには、一定の高さにブラウン管を並べて、波が押し寄せるような画像を流した。（注：現存せず）

我々の時代は不思議だった。インテリアといっても草分けだった。

まさに松本所長は、日本のインテリアの世界を牽引されてこられました。そして松本所長が中心になって剣持勇の作品集《剣持勇の世界》（河出書房新社）をまとめられました。特に第四分冊の年譜・記録は、剣持先生の誕生前の1901年から亡くなられた1971年までの剣持勇先生の軌跡に加え、建築・デザイン界の動向、文化・社会動向まで記載され、大変貴重な資料となっています。

（構成：飯田郷介）

《剣持勇の世界》
編集：《剣持勇の世界》編集委員会
責任編集：松本哲夫＋宮内嘉久
編集・構成：杉浦康平＋中垣信夫
撮影：石元泰博＋臼井正夫＋立花義臣＋土橋和夫＋
　　二川幸夫＋藤本鋏二＋村井修　他
造本：杉浦康平
限定　1,000部発行



《剣持勇の世界》全１巻５分冊（河出書房新社）

会員活動レポート

智を以て策を練り　美を以て術を成す

株式会社策ト術 代表取締役
日本建築美術工芸協会会員
髙木久美

子供のころからものづくりが大好きで、特に大きな作品によって空間を変える力をもつ彫刻に興味をもち始めたのは小学生の頃、当時ベッドタウンだった住宅地の周辺は緑が多くの残っていて、その森の茂みをくり抜くようにつくられた公園を発見したのが始まりでした。その公園の遊具というのは木や蔓などすべて自然物でつくられていて月日が経つ中で変化してゆく、自然の中に人の手がいい感じに加わったものでした。その公園が近所に住む彫刻家の作品と知ったのはそれからだいぶ先のこと。

バブルへ向かっていた当時はアートを日常にという活動が広がっていた頃で、キャンプ好きの家庭で育った私は観光地に建つ美術館に連れて行ってもらうのが楽しみでした。美ヶ原高原美術館や箱根の彫刻の森美術館といった存在は、こんなに大きな創造物を自由につくれる職業があるのだと子供に錯覚させるには十分でした。その後、美大を出て芸術家として続けてゆくにはどうすべきかという恒例行事を体験するも、順調な活動と相反するように生じるアイデアの枯渇、さらに優秀でクリエイティビティにあふれた人達が表現活動を辞めてゆく現実、作品をつくろうとすればするほど息苦しくなる実感、私にとってアート界は酸素の少ない高価な水槽だと感じた時、そこから出て大海原を泳いでみようと思うようになりました。

アートという言葉から自由になること

歴史の記述や表現の流行という側面ばかり気になっていたのはマーケットに対する視野の狭さだったように思います。私はアートとされたものを消費させてゆくことに関心があるのではない、さらに芸術文化を支援する立場でもない、むしろ別の役割があるものに対して「アートから学んだ既成概念を覆すエッセンスや奥深い物語を宿してゆくことに関心がある」ということが明確になってからは、作品づくりにあった創造的なプロセスをもっと楽しみ活かして誰かの役に立てないだろうかと考えるようになりました。

多種多様なクライアントにかかわる建築の世界は私の視野をひろげてくれました。

建築とアートは関わりの深いものですが、むしろそれを必要としていないクライアントに提案する「策を練ること」に面白さを感じました。世の中の価値が物質的なものやブランド、その性能だけでなく考え方やストーリーといった文脈に向かう時代への移行は、ビジネスフィールドで創造的発想力を試すという未知であるからこそ、その可能性を感じたのです。

「より多くの人と、より永く、クリエイティブに生きること」

これにおいて私は美術家ではなく会社経営という道を選びました。創造的な場に身を置くこと、それを継続させてゆく方法が芸術家でなく会社であったといえます。どちらにせよ継続することは大変ではありますが、その先にいる人が想像できて、社会との繋がりを感じられることは大きい、今あるこの世界で誰かの為に目的をもって創造することは、きっと無駄ではないし、そこから生まれる新たな世界を見てみたい、計画的に継続することを目的としている会社の形は素晴らしいと思うようになりました。

クライアントやその先にいる人を想像しながら、コンセプトメイク、ストーリー立て、付加価値のあるアイデアやサービスを目指した思考の先に美しいかたちが生まれるとしたら、その一環である策略と技術は紛れもなくアートであるのだと。

日本の言葉でアートを語る「策ト術」

アートの重要な意味は新しいものの見方に気づかされ、違う角度から世界を眺められるようになったこと。その策（サク）と術（スベ）を一つの場として沢山の創造的な表現ができる会社を目指し、今はプロジェクトに合わせ、あらゆる技術をもった職人さんたちと組んで仕事をしています。場の変換や場の創造を使命とした活動をしていけたらと考えながら、一歩一歩目の前のディレクションに取り組み、アートの源を社会の役に立たせてゆく活動を楽しんで努めて行きたいと思っています。

30周年を迎えられるaacaの中で正直何ができるかはわからないのですが、この策ト術をとおして化学変化の中継ぎができるようなれたらと思いながら、皆さんから学ばせていただける機会を大切にしたいと思っております。

最後になりましたが昨年末、東條隆郎様、佐藤正徳様にこのようなお話をさせていただく機会があり、aacaへの入会のご案内をいただきました。素晴らしい機会をいただきましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

現代アートとしてのガラスの可能性

ガラスアーティスト
日本建築美術工芸協会会員
中嶋クミ

ガラスという素材には、どんなイメージがあるのでしょうか。ガラスの用途は、日用品、建材、化学器材、光学、美術工芸品などさまざまです。ガラスの起源は紀元前まで遡ることができますが、産業や工芸文化の中で発展していった時代背景を持つ一方、ガラスが個人の作家のアート表現の媒体として使われるようになったのは、長いガラスの歴史から考えるとごく最近のことのように思われます。

私がガラスアートと出会ったのは、1997年のアメリカです。当時、私は夫の留学に伴い、カリフォルニア州のバークレーという街に住んでいました。この地域には、1960年代から始まったアメリカのスタジオ・ガラス・ムーブメントで活躍したアーティストたちやその門下生たちが活動の拠点としていたこともあり、吹きガラスを中心としたガラスアートを学べる大学やスタジオがたくさんありました。用途が明確なガラス作品だけでなく、とても抽象的なガラスの作品を間近に目にすることができたのはとても幸運でした。1000℃以上の高温で溶かされたガラスを自在に操るアーティストたちの姿に憧れ、義父や夫の勧めもあり、サンフランシスコ州立大学（SFSU）美術学部に編入し、ガラスと陶芸を専攻しました。卒業後、家族の都合でハワイ州に引っ越すことになり、ハワイ大学マノア校（UH）大学院のMFA（Master of Fine Art/ 美術修士）プログラム、ガラス専攻に入学。卒業後は、現地の高校や大学でガラスアートの指導をしながら作家活動を続けていました。

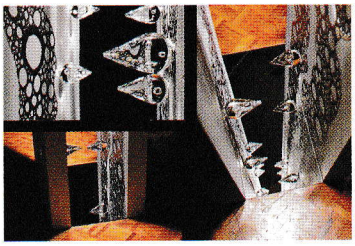
大学院在学中の私は、インスタレーションの手法を使って、ギャラリーの台座に置かれたガラス工芸品というガラスアートの一般的なイメージをいかにして壊すかという挑戦をしていました。展示室の可動式の壁と全く同じ手法で作った壁に、光の屈折による効果が出るように成形したガラスや鏡をはめ込み、壁の内側と外側に違う空間を作り出すことによって、作品とギャラリー空間の境を曖昧にした作品、The Galaxy。溶けたガラスを溶岩に見立て、ハワイ神話に出てくる火山の女神ペレを題材にしたビデオインスタレーション作品、Caldera Tears。日本庭園のようにガラスを床に配置したROYGBIVでは、ギャラリーの建築構造を生かして、作品が一望できる2階部分にUrsa Majorという全く別のタイトルプレートを配置することで、同じものでも見る（見える）位置によって見解が変わることを表現しました。総合大学なので、専門科目以外にアジア系アメリカ人の歴史や、日本の茶道を学ぶ機会にも恵まれ、遠く離れた日本文化の特異性や美しさを再発見できました。これらの経験は、今の私の作品作りに大きな影響を与えています。

2011年から作り続けているCrioustonsというシリーズ作品は、日本庭園の庭石からヒントを得ています。素材には日本の金沢で生産されている銀澄という素材をガラスに巻き取って使用しています。このタイトルは英語のcurious（好奇心）とstone（石）という二つの単語を組み合わせて、私が作った造語です。シリーズ初期の作品　Crioustones～Dialogueはハワイ州立美術館に所蔵されています。

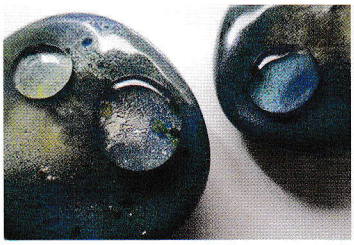
今年の3月、銀座にあるギャラリーART FOR THOUGHT（アートフォーソート）で開催した2人展「共振：RESONANCE」では、その進化系となる新作、箱庭シリーズを発表させていただきました。2014年の本帰国後、ガラスアーティストとして続けていくか迷った時期もありましたが、数々のご縁に感謝しつつ、これからも、ガラスアートの可能性を信じて活動を続けていこうと思っています。

The Galaxy

ROYGBIV/Ursa Major



The Galaxy 内部詳細



箱庭～ RESONANCE

空間におけるテキスタイル作品の制作について

テキスタイル造形作家
新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員
雨山智子

新制作展のスペースデザイン部にテキスタイルを素材とした作品を出品しはじめた1990年頃から、コーディネーターの方々やアートワークの会社に声をかけていただき、ホテルや病院などのパブリック空間に作品を制作するようになった。

学生時代は家政学部でテキスタイルデザインを専攻していたが、デザイナーという職業は自分には合わないので、美術の教員になって個人の制作を続けたほうが良いと思っていた。中学・高校時代の恩師の画家としての活動や、作品に向かう真摯な姿勢を見てきたからかもしれない。大学で学んだ染色の中でも、布に直接パターンをプリントするシルクスクリーンの技法は、版画のように制作できる楽しさがあった。そして、教員になることは制作を続けていく手立てでもあり、前述の新制作展への出品は、母校の私立中学校に職場を移って、ようやく制作するためのリズムができてきた頃のことだった。

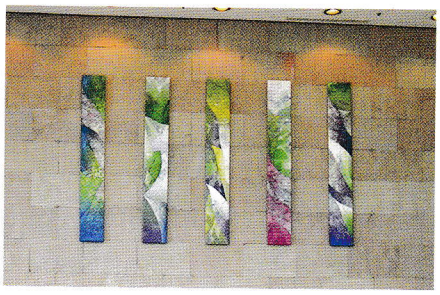
美術館やホールなどの大きな空間への展示や、テキスタイルという素材での制作は、フレーム作品のような凝縮した世界を表現することとは異なり、周囲の空気も取り込むような作品づくりにつながっていく。平面作品でありながら、半立体としての空間の把握が必要になってくるのではないだろうか。そんなことを考えながら、空間に新たな空気感を生み出すことができるような作品をつくりたいと思っていた。設置場所の下見をしたり図面を読み取ったりしながら制作するのは、デザイナーの仕事に近いものだが、ひとりで作品に向かうだけではなく、どこかで社会につながっている新鮮さも感じていたのだと思う。

当初は、抽象的、幾何学的なパターンを色彩のグラデーションで表現したパネル仕立てのタペストリーを制作していたが、2003年頃に捺染用のインクジェットプリンターの展示会に偶然行き合わせたことから、自分が撮った写真をプリントした布も用いるようになった。今は、小さなものはパソコンの印刷用プリンターで出力し、大きなものは写真データをパソコンで加工して業者に外注している。それらの布と、自分で染色した透ける布や目の粗い布を重ねて質感や色彩をつくり出すことが多い。

写真を用いるようになり、植物のように具象的なモチーフで表現する作品が増えた。明暗も写真の中に存在する光や影で表している。また、水や空や砂などの写真を、元が何だったのかわからなくなるまで加工して、抽象的な表現に変化させていくことも興味深い。注文制作の際、作品の一部に好きな植物や風景を入れて欲しいという要望が時々あり、最初はびっくりしたが、その撮影のために出かけたり植物を探し回ったりすることも、今は面白く感じている。（写真2の作品はクローバーを、写真3の作品は地元の風景写真を入れて欲しいという要望があった。）

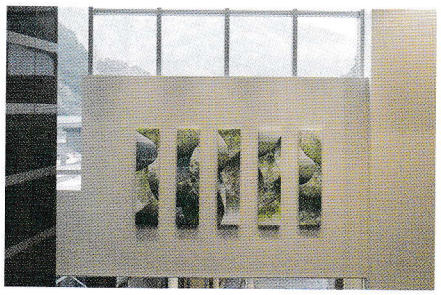
専任教員の仕事は辞めたが、現在も高等学校の工芸の授業を担当し、別の大学や専門学校でテキスタイルデザインの非常勤講師をしている。教えることで自身が立ち返る原点は、必要な時間を積み重ねて自らの手で作品をつくり上げていくことの大切さや、自分にしか表現できない世界を見出すことではないかと思っている。どのように機械が進歩しても、つくり手は人間であることを伝えていきたい。

展覧会での作品発表も続けてきているが、これからも新たなことに取り組んでいけたらと思う。昨年の個展の際、aacaの会員の方が感想の中で「結界」という言葉をおっしゃった。これまでは、作品が存在する側の空気をつくることに重きをおいてきたが、では作品の向こう側、あるいは作品の中には何があるのか、最近はそんなことも思いながら制作している。



1. 玉川高島屋SC
エントランス
（2006/1年間展示）

2. 個人邸（2013）



3. 蒲郡市セレモニー
ホールとぼね（2016）

香港「志蓮淨苑」の思い出

黒谷美術株式会社　専務取締役
日本建築美術工芸協会会員
黒谷宗弘

「九龍半島の人達に取り、香港側で生れるか中国側で生れるかは大きな違いです。」九龍のお寺 Chi Lin Nunnery の Redevelopment Committee メンバーのジミーさんの言葉です。しかし中国から香港に入り込んでくる人々はいるもので、志蓮淨苑の前の丘にはいつしか住居が密集するようになります。いわゆるバラックです。イギリスが中国に新界を返還し、香港島・九龍を引き渡すにあたり、資本主義の負の光景の解消が求められ、彼らは政庁が用意したアパートへと引っ越して行きます。そしてお寺は、場所を移し建て直すのです。20 世紀最後のアジア最大規模の木造寺院の建築計画の始まりです。

縁（Yun）があり、このプロジェクトに黒谷美術が参加することになります。本堂他に釈迦など仏像 8 体と万仏塔に納める 700 体の小さな仏像、そして境内に屋根付き香炉を製作することになったのです。香港側は女性のマスター（先生）、英国人とのハーフの仏師そして委員会メンバーです。日本側は私と親戚の鍛冶さんとで案件を受けて纏めて行きます。外注先 2 社の協力を得る大きな仕事となりました。色々ありましたが仕事の結果は、新しい寺院で見るように満足の行くものでした。

このプロジェクトの寺院本体の建設には奈良の人達が協力しています。寺院の木造建築には何年も貯木した狂いの出にくい木材が必要となります。昔ながらに水面で貯蔵し乾燥した大きな材木ともなると、京都などの文化財の修理用に蓄えられた材料として日本だけが持っていました。しかしこの備蓄を出すと代りの材料の入手が課題となります。お寺の再開発委員会は香港政庁に話をし、それはイギリス本国に伝えられ、旧連邦のカナダ政府の協力を得られることになりました。つまり日本が放出した材木の代りに、カナダから日本に大きな材木が引き渡されます。これは鍛冶さんから聞いた話です。

あれから 20 年が過ぎましたが、彼らが来社したある日の立山工場での夕日が凄まじく綺麗で、彼らが撮影するビデオカメラが仏像から夕日へと向きを変えたことを思い出します。仏師のデリックは夕日を背景に私たちを歩かせ、目をすぼめて夫々のオーラ（仏教では後光）の色を見てくれました。また彼にと用意した古い社宅の鍵が回らない時、私たちを制し自ら鍵を持ち、他の手の指先を添え何かの力を注ぎ、鍵を容易く回していました。車中で彼に、あるチベット寺院の僧侶達が宙に浮く話をすると、「彼らは超能力を使うんだ。」と知っていたようでした。

委員会のメンバーはボランティアであり、寺院と縁があった力のある人達です。帰依した仏教徒ではない人も、メンバーは自らの責任から寺院のために力を費やしました。仏教は、人が人生を繰り返していること、その捕らわれのサイクルから離脱すると言う目標「解脱」を示しました。人生を超えた目標です。今日の日本は少子化であり、次に生まれる時は日本人ではないかも知れません。今の恵まれた機会を生かし、次の世代のために何かができます。人は無になるだけの存在ではありません。私たちは戻ってきます。

Chi Lin Nunnery
5 Chi Lin Drive, Diamond Hill, Kowloon, Hong Kong
香港ナビ https://www.hongkongnavi.com/miru/76/

チーリン寺院　屋根付き香炉（黒谷美術株式会社）

チーリン寺院　本堂内仏像（黒谷美術株式会社）

法人会員の企業活動を訪ねる

コクヨ株式会社を訪ねて

広報委員会

コクヨ株式会社様（以下コクヨ）は、今年ご入会いただきました。「コクヨ」と聞きますと皆様は小学校から中学、高校、大学と、学生時代は、キャンパスノートや文房具あるいは教室にあった机と椅子にお世話になったと思います。そして社会人になってからは、オフィス家具、事務用品など「コクヨ」ブランドに囲まれてサラリーマン時代をすごされている方、すごされた方も多いのではないかと思います。この大変馴染のあるコクヨ（本社大阪市）の事業活動をお聞きするために品川のオフィスに伺いました。

事業内容は、紙製品や文房具の製造・仕入れ・販売、オフィス家具の製造・仕入れ・販売、空間デザイン・コンサルテーションなどで、「はたらく」、「まなぶ」、「くらす」の三つの領域で事業を展開されています。

□「紙から鉄へ」紙製品の最大手が昭和35年スチール製品分野へ進出

コクヨは、1905年（明治38年）、黒田善太郎が大阪市西区南堀江に和式帳簿の表紙店を開業した「黒田表紙店」（1917年商標を「国誉」と定め、1961年現社名に変更）が始まりです。その後、洋式帳簿の販売や伝票、仕切書、複写簿、便箋などの製造により紙製品製造メーカーとして、1954年に創業50周年を迎えた頃には、紙製品業界のトップ企業となりました。

そして1960年、スチール製のファイリングキャビネットを発売され、スチール製品業界へ参入され、スチールデスク、キャビネット、事務用回転椅子など、今では、家庭に、学校に、オフィスになくてはならない大企業に発展されました。

コクヨ初のスチール製品　ファイリングキャビネット（昭和35年発売）

胆大心小の企業戦略は、社会のニーズに応えるため。

昭和35年（1960）、コクヨのスチール製品発表のニュースは、業界で大きな話題になりました。帳簿からはじまり、便箋、帳票類、ノート等々、紙製品で最大手に成長した企業が、全く異なる分野へ参入することは、当時としては奇想天外な出来事だったようです。もちろん、コクヨにとっても「紙から鉄へ」の転換は、大きな挑戦でしたが、その最初のスチール製品「ファイリングキャビネット」開発の背景には、実際には用意周到な事業戦略がありました。まず、当時、高度経済成長により巨大化、複雑化する企業、官公庁で、増大の一途をたどる文書を効率的に管理する米国発祥のノウハウ（ファイリングシステム）とサプライズ（紙製品）の需要が高まりつつありました。こうした流れを受けて、すでにファイリングキャビネットを製造しているメーカーはありましたが、同時にサプライズを供給できるところは皆無でした。また、コクヨには専門代理店という強固な全国販売ネットワークがあり、いずれものこのネットワークを通してスムーズにお客様にサービスを提供できるという強みがありました。

こうして、単に「鉄の箱」を売るのではなく、文書の保管テクニックを同時に提供するという、コクヨならではのファイリングシステム販売体制を確立することができたのでした。

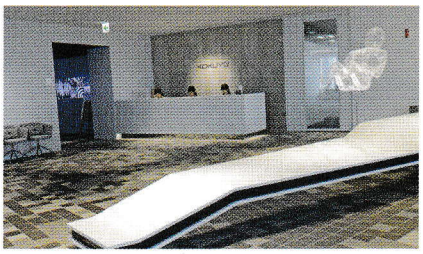
ファイリングキャビネット発売当時のリーフレット

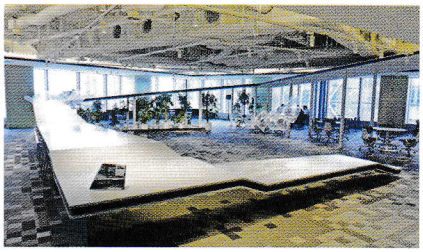
コクヨホームページより

□社員が実際に働く姿を見学できる“生きたショールーム”「ライブオフィス」

モノづくりと空間構築、ワークスタイルの研究を通して、さらなる可能性を追求されているコクヨは、1969年、日本初のライブオフィスを設立され、「働きやすい空間、使いやすい家具」づくりのため、モノづくりと空間構築、ワークスタイルの研究を通じて、さらなる可能性を追求されています。

広報委員会は、2017年に品川に開設された東京品川SSTオフィス（品川シーズンテラス18階）を訪ね、コクヨの沿革や取り組みなどを伺ってきました。





東京品川SSTオフィスのエントランスの様子

（撮影：飯田郷介）

□「働く」「学ぶ」「暮らす」新しいシーンを提案する国際デザインコンペティションの開催

コクヨでは、使う人の視点で優れたデザインを、広く一般ユーザーから集めて商品化をめざすコンペティション「コクヨデザインアワード2018」(2018年6月22日（金）から8月31日（金）まで作品を募集され現在は募集は締め切られています)を開催され、受賞作品の中から数々のヒット商品が誕生しています。

（今年は、「BEYOND BOUNDARIES」というテーマで開催され来年1月18日に審査発表が予定されています）

（構成：飯田郷介）

「コクヨデザインアワード2018」を開催

～審査員は植原亮輔氏、川村真司氏、佐藤オオキ氏、鈴木康広氏、渡邉良重氏～

「コクヨデザインアワード」は、2002年の創設以来今回で16回目（2010年開催のみ休止）となり、これまでに受賞作品の中から「カドケシ」や「キャンパスノートパラクルノ」、「和ごむ」、「なまえのないえのぐ」、「本当の定規」などのヒット商品が誕生しています。前回（第15回）の応募件数は合計1,326点、応募者の国籍は日本を含めて53カ国におよび、プロダクトデザインの国際コンペティションとしても成長しております。

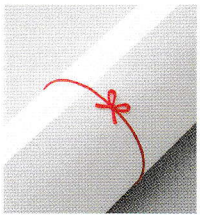
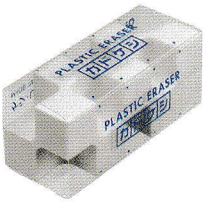
近年、『美しい暮らし』(2015年)、『HOW TO LIVE』(2016年)、『NEW STORY』(2017年)と、プロダクトの機能性、実用性やデザインの美しさだけでなく、人々の仕事や学び、生活のシーンにおいて、新しい価値やストーリーの提案を期待するテーマを掲げています。

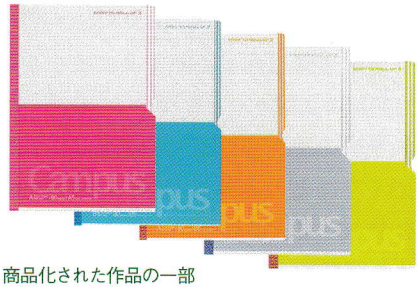
そして今年のテーマは『BEYOND BOUNDARIES』です。コクヨの事業領域においても、仕事と生活の境界の曖昧さ、コミュニケーションのフラット化が進むなど、今まで当たり前に存在していた境界のあり方が変化しています。一方で、国や文化、ジェンダーなど、社会的にも境界を越えるというテーマは注視に値すると考えます。

社会的な境界でも、身の回りの小さな境界でも構いません。境界を見つけ、その境界を越えることで見える新しい世界や、生まれる新しい人や物事の関係性を提案してください。

募集対象は、「働く、学ぶ、暮らすシーンで用いる文具・家具・道具全般」です。昨年は、食べ物を道具として捉えた作品が受賞しました。コクヨの主要商品カテゴリーである文具、家具だけでなく、生活で用いる道具全般が対象ですので、柔軟なアイデアを期待しています。

審査基準は、「新しい価値を提案している」「生活のシーンを提案している」「商品化の可能性がある」の3点です。提案に新規性があること、提案するプロダクトによって実現される生活のシーンまで考えられていること、商品化の実現性が検討できていることを総合的に評価します。



商品化された作品の一部

コクヨホームページより

第２回 BOX 展　―30cmx30cmx30cm の空間を遊ぶ―

開催報告

BOX 展実行委員長　**山﨑和子**

会　　期：2018 年 7 月 3 日（火）～ 9 日（月）
　　建築会館 1F ギャラリー
出　品　者：47 名（会員 18 名・一般 27 名・学生 2 名）
作　品　数：50 点（会員 19 点・一般 29 点・学生 2 点）
来　館　者：245 名
審査委員長：中村茂幸
審 査 委 員：南三一郎・山極裕史・中野恵美子・田島一宏

多数の作品数で大変変化に富んだ楽しい遊びの空間の展覧会が出来ました。

表彰式・レセプションに岡本会長はじめ多数の参加者で盛り上がり、初めてのオーデエンス賞、協賛の株式会社クサカベ・株式会社文房堂・光ステンド工房からの副賞のある表彰式でした。

展覧会終了後新たな数名の出品希望者がありました。大変嬉しいことです。

第 3 回 BOX 展 2019 年 7 月 2 日（火）～ 8 日（月）に決定しました。

最優秀賞　鈴鹿しげみ（一般）
『A planet ある惑星』:ガラス

優 秀 賞　二木　啓子（一般）
『界自由』:陶器

大谷美智子（一般）
『発芽』:生糸、テグス、レーヨン

佳　　作　川口　満（一般）
『記憶』:漆、金属、木

須齋　尚子（一般）
『"Light" from a certain woman』:陶

まつい由美子（一般）
『バタフライ　エフェクト』:紙

特 別 賞　河端　梨太（一般）
『紙一枚の可能性』:ケント紙#200

オーディエンス賞　星　素子（会員）
『IMA　生きる』:アクリルガラス

審査講評

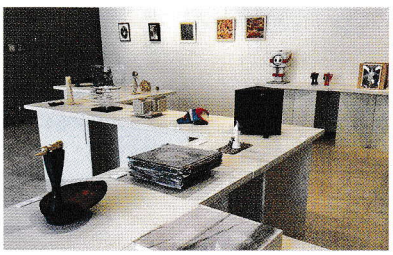
審査委員長　**中村 茂幸**

30 センチの小さな空間の中で作品がどう表現されるのか昨年の 1 回目の出品作品からさらにレベルアップした 2 回目となる今回の BOX 展の審査は楽しくもあり優秀な作品が多いがために大変難しいひと時でした。

あらゆる分野のアート作品はなかなか甲乙つけがたく私たち審査員を悩ませました。その中でも鈴鹿しげみ氏の作品はガラスの透明感を有機的な形で表現し 30 センチ角の小宇宙的空間で丁寧に仕事をされていました。5 人の審査員全員が推した作品です。今回の賞には入らなかったのですが陶や石の作品には優秀な作品が多く評価点が一分野に偏らないように苦心しました。平面の作品にも大変優秀作品がありましたが BOX 展ですので平面でありながら 30 センチ角の空間を意識した工夫が作品に欲しかったと思います、これは次回の課題となります。

なお今回の審査基準は / 独創性 50 点 / 技術的完成度 30 点 /BOX 空間との関係性 10 点 / その他特筆すべき加点 10 点 / 合計 100 点　これらにより各審査員が 7 作品をそれぞれ選出し協議の上で決定しました。点数配分には今後の検討の余地がありますが次回応募される際には参考にしていただきたいと思います。

会場風景



BOX 展に参加して

最優秀賞　鈴鹿しげみ

気が付いたら彫刻に心惹かれてこの道にいた。

高校時代には美大進学を考えなかった訳では無いが興味が絞れずに自然科学の教職に就いた。その後 30 代にイギリスに留学し、美術館、博物館を見て回り、イタリア、オーストリアへも足を延ばし、石造りの建造物やカメオの彫刻等の素晴らしさに心を打たれた。ヨーロッパは街中が歴史ある芸術に溢れていて、建物だけが時を止めているかの様に感じられた。けれども現代に生きる人々の日常に溶け込んでいた。その時経験した事が無意識に蓄積されたのだろうと、ある日突然気付いた。今まで目の前にずっと『存在』していたのに自分に見えていなかったモノが、自然科学も美術の世界も決して別々のものではなく同じ世界を構成するピースの一部であり、混ざり合って存在していても不思議ではないという事に。

岡本会長から表彰を受ける鈴鹿しげみ氏（手前左）

それから私は彫刻の道を選び作品制作を始めた。木彫、和紙、発泡スチロール等の素材で試行錯誤する中でガラスに魅力と可能性を見出して表現する手段として選んだ。イメージに近く造形するには、常に動かし火に炙り続けなければならない中で、思い通りにならないが、それが私にとって「重力を使って彫刻をする」という意味を持っている。ガラスはやり直しの効かない一瞬の作業の連続である。その場の状態を判断してデザインを変更する場合もある。

そうして出来た作品が初めにイメージしていたよりいい作品になったりすることが面白い。私の作品は宇宙、生物、生命とか自然科学的テーマが多くなっている。今回の受賞作品『A planet（ある惑星）』は限られた空間で何か表現できるかという点でも色々考えさせられ、シンプルでかつ空間の拡がりを感じさせるコンセプトで制作した。所属している美術団体とは違う分野の審査員の方々に評価して戴き、最優秀賞を受賞したのは望外の喜びだった。

ガラスの魅力である透光と屈折の妙、質感、宙空に浮かぶように見える色の映り込み等楽しさや美しさを感じて頂ければ作家冥利に尽きる。昔私の目を開かされてくれたように身近に芸術が自然の様にある環境は人の精神に影響を与える。私の作品も人の暮らしと共に在って欲しいと願っている。

特別賞　河端　梨太

埼玉県立新座総合技術高等学校

私は、新座総合技術高等学校のデザイン科に通っています。イラストを描くことが好きできちんと技術を身につけたいと思い、デザイン科に進学しました。

学校では、色彩構成やデザイン製図などの専門的な授業を受けています。その中の工業技術基礎の授業の中でこの作品を作成しました。

岡本会長から表彰を受ける河端梨太氏（手前左）

作品名は「紙一枚の可能性」です。ケント紙一枚を切り離してしまうことなく、切れ目を入れたり、折ったり、貼り付けたりしてひとつの立体作品を作りました。

作る時に意識したポイントは、一枚の紙の中に様々な空間があり、それが淀みなく一つにまとまるようにしたことです。

作り始めたときは上手く作る自信がありませんでしたが、作っていくうちに面白くなり夢中で作成しました。

先生に声をかけられて BOX 展に出展することになりました。今回、特別賞を頂いたことによって色々な事を学び、吸収することができました。沢山の人に作品を見てもらえた事はとても励みになりました。

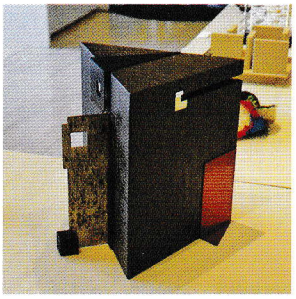
今後はさらに技術を身につけ、また沢山の人に見てもらえるような作品を作りたいです。

受賞作品

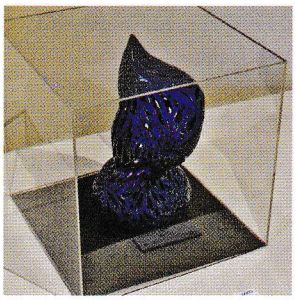
● 最優秀賞

鈴鹿　しげみ（一般）　A planet（ある惑星）
ガラス
私の彫刻の出発はミクスドメディアや木彫だったが、現在ではガラスという素材を用いて、生命や宇宙を表現している。今回出品させていただく作品は、光とガラスの写り込みを楽しんでいただければと思っている。

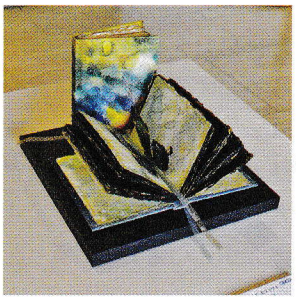
● 佳作



川口　満（一般）　記憶
漆・金属・木
記憶は過去でありながら、知識となり現在にあり、そして未来へと夢を拡げて行く可能性を秘めています。記憶への思いを立体の形で創作しました。



須齋　尚子（一般）"Light" from a certain woman
陶
体を捻って佇む女性（中央：陶オブジェ）。そこから放たれる光たち。彼女の中の喜怒哀楽あるいは情念を司るエネルギー（光）が、30㎝の立方体の中で時に強く時に弱く、様々な色やカタチで動めく。



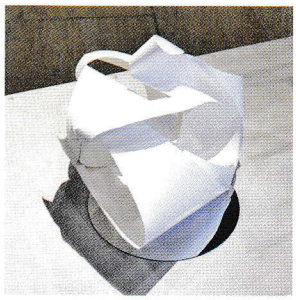
まつい　由美子（一般）　バタフライ　エフェクト
紙
「バタフライ効果」をテーマに制作した「アーティストブック」。蝶のはばたきのようなごくわずかな力が、時間の経過によってその後大きな差を生む。ひとつの本を手にとったかどうか、未来への扉はどこにでも存在する。

● 優秀賞

二木　啓子（一般）　界自由
陶器
人間界を自由に動きまわり、災害などにより被害を受けた人たちを助ける怪獣。

大谷　美智子（一般）　発芽
生糸・テグス・レーヨン
萌えいずる発芽する生命力を、アフガン編みで表現しました。

● 特別賞



河端　梨太（一般）　紙一枚の可能性
ケント紙＃200
この作品はケント紙一枚からできています。作品を制作する時に意識した事は空間です。一つの紙の中に、様々な空間があるのに、それが淀みなく一つにまとまるように作りました。

● オーディエンス賞

星　素子（会員）IMA　生きる
アクリルガラス
漢字（象形文字）の「生」をモチーフに層を重ね「今」を表現し問いかける作品。全方向で漢字を感じて。＋地球は丸く自然も人も揺らいでいる世界。水平と垂直が交わるキセキがIMAかもしれない。

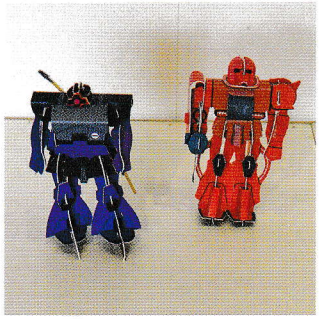
出品作品

服部　多加志（一般）　内包
木、ステンレス、鉄（台座）

かねなが・はるお（一般）　龍の手
カラーインク

浅見　恵子（一般）　Le boutis の様に～
皮革（ヤギ）

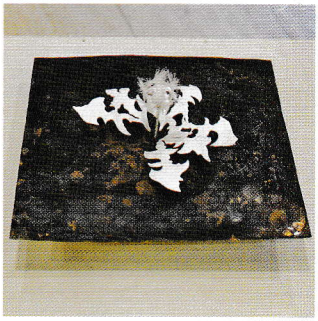
村田　琴音（一般）　閉じ込められたカブトムシ
パネル、水彩、アクリルガッシュ



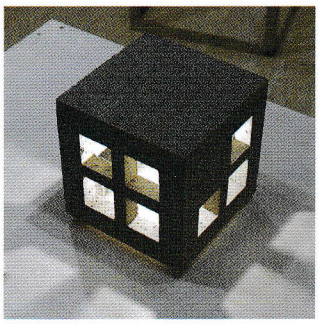
平野　忠世（一般）　ペーパークラフト・ガンダム
紙

品川　未知子（一般）お花畑の小物入れ
布・糸・アクリル BOX・ビー玉

吉田　実（会員）　Dream layer・夢層
紙



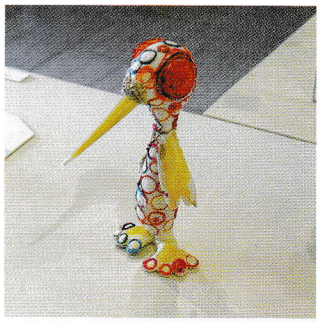
児玉　須賀子（一般）　たんぽぽ
銀・銅・粘土・毛筆・極細ワイヤー



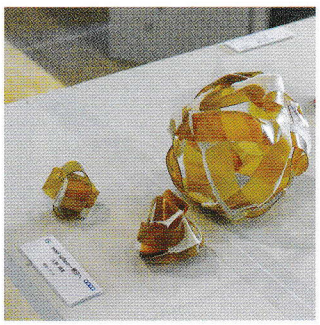
小路　隆（一般）　フロアライト：cube
コンクリート

黒木　昭衣（一般）　潮騒
木綿・銀糸・銀泊・色泊

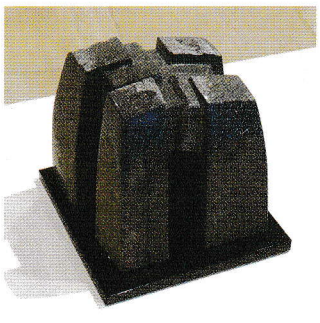
五十嵐　通代（会員）　見えているのに見えないもの
絹・綿・ステンレス



久野　博美（一般）　飛べない鳥
ウール・樹脂・ししゅう糸・絹糸



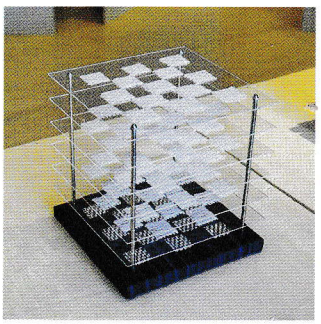
久野　博美（一般）　Wool Sphere ― 明日へ
樹脂・ウール



横山　徹（会員）　建築的　彫刻　考Ⅰ
小松石

横山　徹（会員）　建築的　彫刻　考Ⅱ
小松石

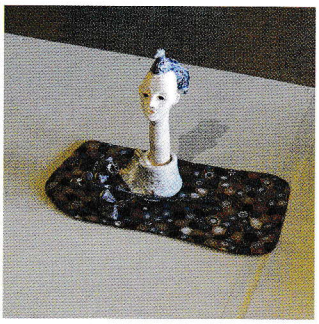
浅野　康則（一般）　la fenêtre
ミックス（墨・アクリル・コラージュ）



深尾　雅子（会員）　Step -by -step
アクリル・布・プラスチック

横沢　和則（一般）　うちゅうポッド U－01
発砲アクリル・ぬいぐるみ

石井　裕大（一般）　空間支配線争
コンクリート OA フロア・ケーブル・紙・他



野地　恵（iro 鳥）（一般）　布人（フジン）「森の精霊」
紙・粘土

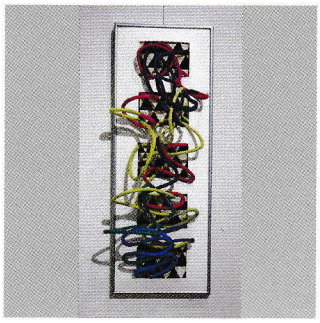
神　芳子（会員）　空気物
藤の皮

熊木　真由美（一般）　夕映えⅠ
布

熊木　真由美（一般）　夕映えⅡ
布

伊藤　幹子（一般）　夢の中に君がいる
紙・マーブルインク

佐藤　静子（会員）　la liberte
麻

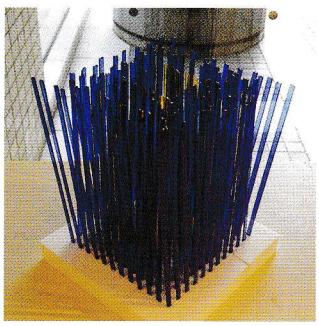


白野　順子（会員）　サンサーラ=オーロラ
布

山﨑　和子（会員）　リズムに乗って！
木・毛糸・麻糸・布・アルミ板

松本　治子（会員）　Another Light
ガラス　鉛

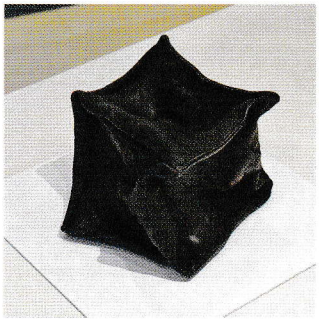
野口　真理（会員）　土のそら
陶土・粉漆・金属箔・コールテン銅



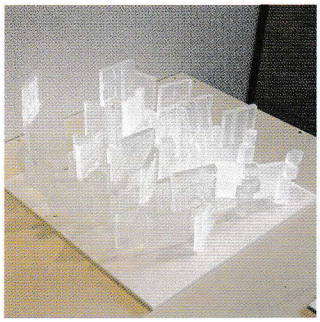
平山　健雄（会員）　分化された光
ガラス

川口　知子（一般）　珊瑚礁
牛厚床革・山羊革（白）

相川　美由紀（一般）　おしゃれした馬（モラ）
布・糸

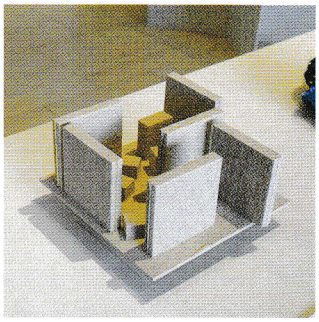


山崎　輝子（会員）　BOX の変容
皮革



中村　弘子（会員）　無題
ガラス

齋藤　卯乃（一般）　2020
漆

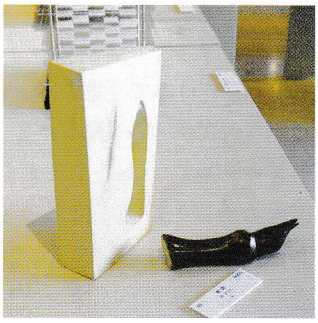


三上　紀子（会員）　小休止
木・塗料

上江洲　牧子（一般）　思い出
ガラス・木・金箔

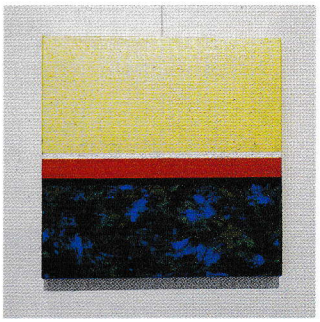
中西　晴世（一般）　森のかけらたち
和紙・木材など

大村　義輝（一般）　Peel
布・糸



神　まさこ（会員）　無題
陶

岡本　明久（会員）　時　Ⅱ
木・和紙・アルミ・岩絵具



松田　静心（会員）　ゴールドラッシュ
…スーパーフロンティア
桜島の灰・アクリル・アルキドテンペラ・箔

第3回 BOX展開催予定

日時　2019年7月2日～8日
会場　建築会館ギャラリー

委員会活動報告

第193回aacaフォーラム開催報告

日本の布づくりと建築空間との関わり

テキスタイルデザイナー
株式会社 布　取締役
須藤玲子

テキスタイルデザイナーとして、布づくりにたずさわって概ね35年になる。今回、国立新美術館において、「こいのぼりなう！」と題した大規模な展覧会を行い、今までにデザインしたテキスタイルの中から319点をこいのぼりとして展示した。それらは、今までデザインしてきた布のアーカイブでもあり、布を立体的に形成すること、空間の中で人と布の果たす役割を実証する試みとなった。

私がデザイン活動を行なっている（株）布は、1984年の設立である。設立当時は、写真のように生成りと藍のミニマルなテキスタイルを扱っていた。村上道太郎の「藍の道」によれば、日本で「藍染め」がはじまったのは「古墳時代」と記されており、「日本の布の色のルーツである藍、そして素材そのものである生成り」を選んでいた。その後、日本国内の藍染め産地を訪ねると、各地の染織産地では、和装文化が培った技術により、新しい布づくりや、さらには特定の産地では、ハイテク技術を駆使し、ユニークな布づくりが行なわれていることを目の当たりにした。そこで私たちは、デザインの舵を大きく切ることとなる。

1980年代は日本のファッションデザイナーがパリコレクションで新旋風を巻き起こしていた時代であり、また、日本の建築家の新しい潮流が生まれた時代でもあった。1987年に私がデザインディレクターとなり、全ての布地のデザインを統括するようになってからは、建築家との協働プロジェクトが次第に増えていくようになった。建築家との出会いは、私たちの布づくりにも変化をもたらし、かなり大胆に、新しいデザインを追求することとなった。特に、今まで布地には使ってこなかった異素材、あるいは布地とは無関係と思われる他分野の技法などを積極的に取り入れ、今までに見た事も無いような新しい布地を次々に発表した。

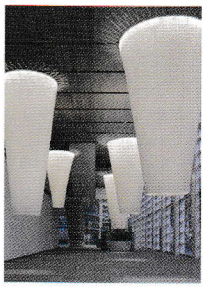
空間でのテキスタイルの役割は、人間に近いところ、例えば椅子、クッション、レストランであれば、テーブルリネン関係が主だったが、建築家との出会いによって、「被膜」「内と外」「空間の分節」などの考え方に触発され、斬新で新たなテキスタイルの使い方を提案することとなった。1990年頃からは、建築を構成する要素として、テキスタイルを積極的に使う建築家が現れてくる。例えば公共建築でのテキスタイルは、暗幕、舞台の紗幕、緞帳、そして堅牢な椅子ばり、絨緞などが主だった使われ方だったが、空間を柔らかく文節するような新しい機能を持った素材として注目されるようになった。昨今は、特に商業空間をデザインする建築家、インテリアデザイナーとの仕事では、テキスタイルはオブジェのように、空間を特徴づける素材として扱う例も多くなったように感じる。

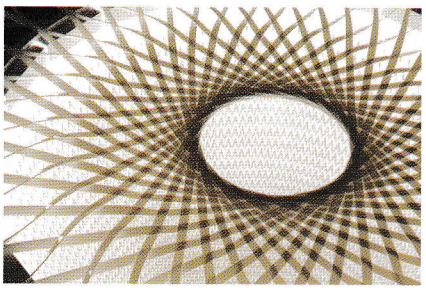
2000年に入り、化学繊維の機能が拡大し、ホテルなどの大規模な公共施設での照明、アートワークにもテキスタイルが生かされるようになり、建具などの分野でも、ガラスに布地を挟み込む技術の確立などもあり、空間でのテキスタイルの重要性は増している。

とは言え建築・インテリア空間では、テキスタイルはあくまで素材の一つとして、縁の下の力持ち。コンセプトも含め、空間イメージを共有し、試作を重ねながら空間デザインを作り上げるプロセスに関わっていくことが重要と考えている。

一方で、テキスタイルは常に進化を続けている。例えば化学繊維では、堅牢度が高く、熱可塑性があり、完全ケミカルリサイクル可能な素材ポリエステルは、今後も大いに可能性がある。カーボンファイバー、グラスファイバーなどの繊維の登場もプラスチックの進化とともに、さらに薄く、軽く、自在な表現を可能にしている。また世界各国は蜘蛛の遺伝子を培養し繊維を取り出す技術を開発中である。日本では鶴岡市の「スパイバー」が開発し、世界に先駆け合成蜘蛛糸繊維「QMONOS」の量産に成功した。蜘蛛の糸は強度もあり、薄く、「被膜」で覆われた車両、建築も可能かもしれない。

新しい繊維の開発は、新しい表現へとつながる。未来はテキスタイルと共にあるといっては言い過ぎだろうか。





大分県立美術館　ユーラシアの庭「水分峠の水草」Photo by Satoshi Shigeta

国立新美術館　こいのぼりなう！ Photo by Ken Kato

aaca30周年記念講演会開催報告
現場からの提言～パブリックアートの現在

調査研究委員会

都市の形成期と高度成長期に、都市の公共空間にアート作品が設置されるようになって、以降市民にパブリックアートとしてその存在が慣れ親しまれてきました。しかし、都市と市民社会の成熟期に入り、今一度その存在理由と設置に至るプロセスを再考すべき時が来ているように思われます。果たしてパブリックアートが真に市民の社会資産となり得ているのか。一方社会資産としてのパブリックアートをどのように作れば良いのか。どのように価値を維持し、さらに街づくりのベースとしていくのか。広い視点でアートをより市民に寄り添ったものにするために、今回あえて「パブリックアートの現在」という題目を掲げ、講演者として現役のアート行政に携わる行政官、アート制作のプロセスを管理するアート・ディレクター、そしてアーティストの三者を招聘し、今日の公共空間におけるアート活動の、現場からの意見を聴取することを目的としました。

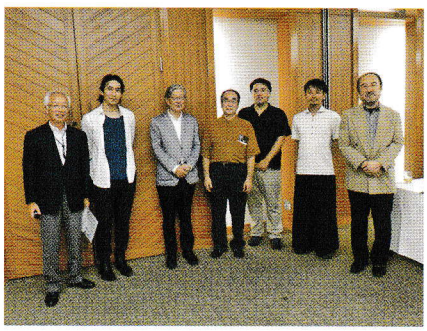
アーティストの浅見俊哉氏は、公共空間でのアートの現場に身を置くことは、より作家としての「覚悟」が必要だと言います。また、従来のパブリックアートが「永久的、固い、限定的」であるのに対し、現在のパブリックアートには「仮設で、柔らかく、参加可能」なものが求められているのではないか。その中で「さいたまトリエンナーレ2016」における「場を捨てよ、街に出よう」をキャッチフレーズに、サンドイッチマンアート（美術館の壁を切り取り街に出る）という「おせっけいな」アートイベントによって市民の日常生活に進入していく活動や、「かがわ・山なみ芸術祭2016」のアーティストの創造力と地域の創造力を交換する芸術祭通貨「LIFE」を通じて、地域と共にアートの場を継続的に育てていく実践などが紹介されました。そこでアーティストがどのように地域で生きていくかが重要であるとの認識が示されます。

アート・ディレクターの山重徹夫氏は、2006年からの中之条ビエンナーレ活動を通じて、廃校などのパブリックスペースを活用し、アーティストの表現の場所を提供しています。山重氏におけるパブリックアートとは、地元の人とそれを取り巻く制度をどのように取り込んでいくかがテーマであると述べます。温泉街や養蚕作業所、シャッターの降りた商店街などにスペースを借りるとともに、アーティスト・レジデンスを確保し、滞在しながら地域の中で作品制作を行っています。また、子どもたちなど町民を巻き込んでの創作イベントは、アーティストとの交流によってアートへの障壁を低くする方向に活動は展開しています。

横浜市都市デザイン室の桂有生氏は行政における都市デザイナーの立場から、街づくりとアートについて紹介を行いました。歴史的には横浜市の3つの基本戦略の一つとして、都市デザイン―都市の個性を作るという目的のために都市デザイナーを擁する都市デザイン室が設立されました。歴史的資産を活かして都市の記憶を守り育てる、公共空間に外部のアーティスト等を導入し新しい資産を作る（クリエイティブシティ）、インナーハーバー構想などの施策があります。80年代からは街にアートを導入する一方、最近は路上フェスやオープンウェディングなど公共空間におけるアートイベントも実施されています。桂氏個人としては公と私がそれぞれを内包する「公私混同」をマインドとして街の活性化に望みたいとしました。

パネルディスカッションでは、パブリックとアートの関係性について討議しました。山重氏は古来の祭りについて総合的な文化活動として再発見させられたこと、桂氏は市民には公共が変わることへの待望があるのではないか、浅見氏は公共の場での無形のアート（文化）活動の実践について言及しました。次いで「協働」をキーワードとして、アートに関して市民を主役とする関係者が充分な会話を通して理解を深めていくことの重要性を確認し、さらに講師の現場からの声を聴取して閉会としました。

（委員長：南三一郎）



「第８回フランス古典技法によるステンドグラスパネル展」講演会「日本福音ルーテル日吉教会ステンドグラスの修復」に参加して

広報委員会

日本建築美術工芸協会展覧会委員会の委員長をされているステンドグラス作家平山健雄氏のお弟子さんたちの「第８回フランス古典技法によるステンドグラスパネル展」が横浜市大倉山記念館で開催されました。この展覧会は今年８回目となり、３年に一度開催されているので、もう24年続いているそうで、10回までは是非開催したいとのことでした。平山健雄氏による講演会が、同ホールで７月22日に催されましたので、ご講演の概要をご紹介いたします。

ステンドグラス作家平山健雄氏は、ステンドグラス制作の傍らステンドグラスの修復も手掛けられ、昨年は４件の修復を請け負ったそうです。その内の一件がこの講演会で紹介された「日本福音ルーテル日吉教会」の建て替え工事のための修復でしたが、平山氏は、自分の工房の近くの港北区日吉にステンドグラスがあったことに驚いたそうです。そしてこのステンドグラスは、1935年（昭和10年）に建てられた東京都中野区鷺宮にあった神学校の礼拝堂を、1969年（昭和44年）に日本福音ルーテル日吉教会の礼拝堂として移築されましたが、このステンドグラスは、1907年（明治40年）に建てられたアメリカ合衆国ネブラスカ州のフリーモントファーストルーテル教会で使用されていたもので、100年以上前のステンドグラスということに驚きを新たにしたとのことでした。

このステンドグラスの中央の王冠は王であるキリストの栄光を表し、白いばらあるいは百合は純血を示し、イエスの誕生を表しているそうです。制作から100年以上経っているステンドグラスは、補強材は施工されていますが、鉛の桟は劣化し、ガラスの汚れや破損が10か所以上あり、昨年の８月、礼拝堂の窓からおろして、修復となりました。

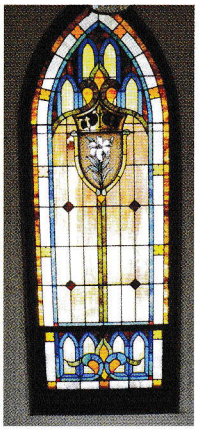
修復の手順

1. ステンドグラスを取り外し、菊名の工房へ搬送。（縦2,400　横　840）〔写真1〕
2. ステンドグラスパネルの上にトレシングペーパーをのせ、鉛桟を全部写し取る。〔写真2〕
3. 分解作業。まず補強棒を取り、ステンドグラスパネルの端からガラスと鉛桟をニッパーを使い分解する。〔写真3〕
   ガラスピースすべてをトレシングペーパーの上に並べ、割れをチェックする。超音波洗浄機を使い洗浄する。
   新しい鉛桟を使い組み立て直す。〔写真4〕
   ジョイント部分をハンダづけする。ハンダづけが終わると、鉛とガラスの隙間にパテを表裏に詰める。〔写真5〕
4. はみ出したパテを掃除する。
5. 補強棒をハンダづけし、下パネルにジョイントチャンネルをハンダづけする。〔写真6〕
6. 再取り付け。

そして最後に平山健雄氏は

「全国に数多くのステンドグラスがあると思うが、捨てられてしまうものもあるだろう。ものを捨てる時代はやめにしよう。古いもの、残すべきものは手だてを講じて残していくべきである。保存・修復のための地道な活動がこれからも要求されるだろう。優れたステンドグラスを次の時代につなげていく仕事をこれからも続けていきたい」とステンドグラスへの熱い思いを語られました。

平山健雄氏講演会開催のご案内
第194回aacaフォーラム
「ステンドグラスの本質～パブリックアートとしての側面からの展望～」
2018年11月5日（月曜日）18:00～19:00　於　サンゲツ品川ショールーム


修復前

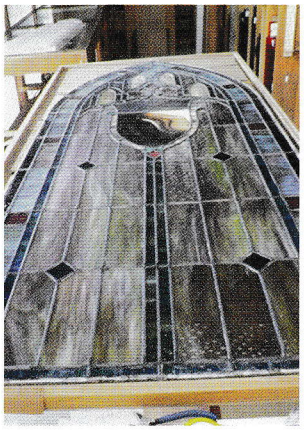


写真１

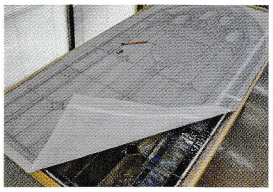


写真２

写真３

写真４

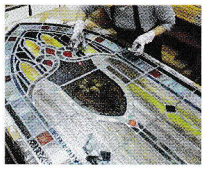


写真５

写真６

修復後

設立 30 周年記念事業

設立 30 周年記念事業実行委員会

194 回 aaca フォーラム 講師　平山健雄 「ステンドグラスの本質～パブリックアートとしての側面からの展望～」	フォーラム委員会	11 月 5 日（月）　サンゲツ品川ショウルーム
30 年度 AACA 賞　公開審査 選考委員長　古谷誠章 選 考 委 員　岡本 賢　可児才介、川上喜三郎、斎藤公男、近田玲子、東條隆郎、藤江和子、堀越英嗣、宮城俊作、米林雄一	AACA 賞選考委員会	11 月 11 日（日）　建築会館大ホール
第 50 回芦原義信記念杯	会員交流委員会	11 月 16 日（金）　富士国際ゴルフ倶楽部
文化事業講演会　「これからの銀座を考える」 第二回　東急プラザ銀座　㈱日建設計 + 清水建設㈱ 「光の器」インターネットでモノがなんでも買うことができる今の時代。我々がわざわざ商業施設に足を運ぶ理由は何でしょうか？我々は東急プラザ銀座のプロジェクトを通じてその問いに答える必要がありました。プロジェクトのスタートから完成まで約 9 年という長い年月を掛けて銀座という街や敷地の特性を注意深く読み解き、21 世紀の新しい商業施設の在り方を提案するために、なぜコンセプトを「光の器」にしたのか、その理由と合わせてご説明します。	文化事業委員会	11 月 20 日（火）　サンゲツ品川ショウルーム
情報文化座談会 内藤　廣、三谷　徹、坂上直哉	情報文化委員会	11 月 30 日（金）　東京藝術大学美術学部
30 周年記念講演会	調査研究委員会	詳細・日時・会場未定
第 13 回　山梨・静岡地区建物視察会 山梨文化会館・山梨県立美術館・富士ハーネス・富士山世界遺産センター 日本平山頂展望施設・草薙体育館・地球環境ミュージアム 茶の都ミュージアム・ROKI Global Innovation Center -ROGIC-	会員交流委員会	12 月 7・8 日（金・土）
aaca アーカイブス展	総務委員会	12 月 7 ～ 12 日　建築会館ギャラリー
30 周年特別設立記念会 30 周年記念式典・功労者記念表彰 30 周年記念講演 28 回 AACA 賞発表・表彰式	日本建築美術工芸協会 芦原太郎氏	12 月 12 日（水）　建築会館大ホール
30 周年記念誌発刊	30 周年記念事業実行委員会	12 月 12 日（水）
文化事業講演会　「これからの銀座を考える」 第三回　GINZA　PLACE　クライン・ダイサム・アーキテクツ + 大成建設㈱ 「新しい銀座のアイコン」時代を反映する新しさを取入れながら「銀座らしさ」は形成されてきた。益々世界に開かれることを期待された街の中心に位置する本プロジェクトでは、これまでの歴史の踏襲とこれからの「銀座らしさ」を形成するための新しさが求められた。洗練されたイメージと、躍動感溢れるグラフィックを両立させる。『FRETWORK（透かし彫り）の白磁』をモチーフとした外観により、日本のクラフツマンシップを発信するとともに、街に良い新たなデザインの刺激を与えることを目指した。	文化事業委員会	12 月 17 日（火）　サンゲツ品川ショウルーム
会報 82 号（30 周年記念号）	広報委員会	1 月 29 日（火）　発刊予定
景観シンポジウム 「これからの都市景観のあり方を探る」 陣内秀信、中島直人・竹沢えり子、他 米田浩二・坂本博之・畑野　了・山本　実	景観シンポジウム委員会	2 月 20 日（水）　日本大学 CST ホール
新年役員・委員・新入会員交流会	総務委員会	2 月 25 日（月）　丸の内ポールスター
195 回 aaca フォーラム	フォーラム委員会	詳細・日時・会場未定
会報 83 号（30 周年記念号）	広報委員会	4 月 26 日（金）　発刊予定

表彰委員会だより

29年度AACA賞写真集　7ページ　応募者より訂正の要請がありました。
写真版権者　外観撮影：雁光社　野田東徳
　　内観撮影：吉田写真事務所　吉田 誠

事務局だより

■新入会員・会員の異動　2018年7月～2018年9月（敬称略）

2016年9月、個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

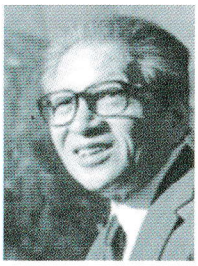
《新入会員》

個人会員	ソレマニエ・フィニィ・アミール（ペルシャ絨毯研究家） 横田昌幸（建築家）、野生司義光（建築家）、須齋尚子（美術家） 品川未知子（日本刺繍作家）、ワクイ WHO（彫刻家） 今村雅樹（建築家）、加藤詞史（建築家）、原　透（教育家）

《会員の異動》

法人会員	スターツＣＡＭ㈱	担当者変更	営業本部営業推進室室長　赤坂武宣 （前任　福丸敦之）
	明治安田生命保険相互会社	担当者変更	不動産部不動産管理グループマネージャー 小崎泰史　（前任　秋元俊一）
	大和リース㈱	担当者変更	東京本店規格建築第一営業所営業一課 高田勝広　（前任　角一吉昭）
	㈱ＮＴＴファシリティーズ	担当者変更	エンジニアリング＆コンストラクション事業本部事業企画部　三浦伸明 （前任　関口　明）
	㈱野口硝子	担当者変更	取締役社長　野口美枝子 （前任　可児友紀）
	㈱クマヒラ	担当者変更	企画本部企画部製品企画室　安部功嗣 （前任　牛込清隆）
	㈱乃村工藝社	担当者変更	開発本部開発第２事業部　開発１部 植田純人（前任　兼平　慎）
	㈱タウンアート	住所変更	〒105-0013 港区浜松町 1-15-3 Ｋ＆Ｙビル７Ｆ TEL.03-5377-6692

― 訃　報 ―　　心からお悔やみ申し上げます。



本間利雄 氏

会　員　　9月19日逝去　1931年生　享年87歳　本間利雄建築設計事務所　代表取締役　1988年入会

日本建築家協会名誉会員
日本建築学会 終身正会員
美し国づくり協会 理事
東北芸術工科大学 理事

作　品　　山形美術館、小国町役場、山形市総合スポーツセンター、山寺秘宝館
　　山寺風雅の国、東北芸術工科大学、左沢駅、水の町屋七日町御殿堰

受　賞　　日本建築学会東北建築賞（作品賞）受賞
　　第36回BCS賞受賞
　　鉄道建築協会賞（作品部門・推薦）受賞
　　グッドデザイン賞受賞

会報寄稿　3・24・60号

編集後記

協会の設立30周年を迎え、本号では「時代の華一輪」の歴史にスポットを当てました。建築家柳澤孝彦が、「会員諸氏の『私と自然』『私と絵画』…『印象に残る風景』『ある街角』『私と絵画』・・・といった思い入れを『一枚の写真』に寄せて語って頂こうというものである」と発案された「時代の華一輪」も建築・都市・美術・工芸など幅広い分野の会員の皆様から貴重な原稿をお寄せいただき、今や会報の大きな柱となっています。これからも会員の皆様のご活躍、思い出などのご寄稿をお待ちしております。

設立30周年記念事業もこの秋佳境に入り、数多くの事業の開催が予定されています。会員の皆様には記念事業に是非ご参加いただき、大いに盛り上げていただきたいと思います。そして主要事業である30周年特別設立記念会が12月12日に建築会館大ホールで開催されますので多くの方々のご参加をお待ちしております。

aaca 2018.10 no.81

発行人　会長 岡本 賢
発行　一般社団法人 日本建築美術工芸協会
　〒108-0014
　東京都港区芝5-26-20　建築会館6階
　TEL　03-3457-7998　FAX　03-3457-1598
　URL　http：//www.aacajp.com
　E-Mail　info@aacajp.com

編集　広報委員会
　委員長　飯田郷介
　　会報担当副委員長　野口真理
　　会報編集委員　五十嵐通代　石田眞人　竹生田 正
　　田島一宏　中村弘子　松本治子
　　三上紀子　山崎和子　山崎輝子
　　山下治子　吉田 誠

編集制作協力　株式会社 アム・プロモーション